

まる一日じゅう，陰鬱なうす暗いもの音もし

DURING the whole of a dull, dark, and soundless day

ない日の，秋の，その年の，雲が掛かった，重苦

in the autumn of the year, when the clouds hung oppres-

しく低く，空に，私は通りすぎていった，一人で，

sively low in the heavens, I had been passing alone, on

馬に乗って，妙に寂しい地域を，田舎の。

horseback, through a singularly dreary tract of country;

そして、ようやく、私はたどり着いた、影が、黄昏の、

and at length found myself, as the shades of the

迫ってくるころ，見えるところへまで，憂鬱な館の，アッ

evening drew on, within view of the melancholy House

シャーの。

of Usher.

私は知らない，どうしてなのかは、しかし、はじめて

I know not how it was — but, with the first glimpse

見たのだが，その建物を、気持ちか、堪えがたい陰鬱な、

of the building, a sense of insufferable gloom pervaded

—1— 崩壊、アッシャー家の

『アッシャー家の崩壊』

エドガー・アラン・ポー著

ナレーター

ウエイン・ジューン

宮下忠雄 聴訳

彼の心は掛かれる琴

触るれば鳴る

デ・ベランジェー

—11— にも拘わらず、この屋敷に、陰鬱な、私は今、意図している、滞在しようと、何週間か。

その主人、ロデリック・アッシャーは、一人だった、私の気の合った友達の、少年時代の、が、長い年月がたっていた、私たちが最後に会ってから。

—10— そこで、この考えにしたがって、私は近づけ、馬を、けわしい崖縁に、黒い無気味な沼の、たたえている、静かな光を、この家のそばに、見下ろした、が、身ぶるいするばかりだった、やはりもつと恐ろしくなり、前よりも、変形した逆さの影を、灰色の菅草や、気味のわるい樹の幹や、うつろな眼のような窓などの。

—6— 氷の冷たさがあつた、沈

みこみと、病みこみと、心の、救いようのない侘しきで、思いの、どんな刺激でも、想像力の、為しえない、何かに、崇高な。

何がこうさせるのだろうか、私は立ち止って考えた、なんだろう、うち沈ませるものは、自分を、見つめているうちに、館を、アッシャーの？

—2— まる一日じゅう、陰鬱なうす暗いもの音もしない日の、秋の、その年の、雲が掛かった、重苦しく低く、空に、私は通りすぎた、一人、馬に乗って、妙に寂しい地域を、田舎の。

そして、ようやく、私はたどり着いた、影が、黄昏の、迫ってくるころ、見えるところへまで、憂鬱な館の、アッシャーの。

—12— 一通の手紙が、ところ、最近とどいた、私のものとへ、遠くの地域にいる、その地方の、手紙である、彼からの、それは、ひどく、せがむような書きぶりなので、仕方のないものであった、私自身が行くよりほかに。

—5— まったくの沈鬱さがあ

り、魂の、諭えることが出来ない、この世の感覚に、もつと適切に、酔いざめの気持ち以外には、耽溺する者の、阿片に、痛ましい移行、日常生活への、いまわしい降下、あのヴェール（覆うもの）の。

—8— 私は仕方なかった、落ちるより、満足しがたい結論に、そこには、疑いなく、組み合わせがあるのだが、まことに単純な自然物の、力を持っている、このように影響する、我々に、そして、分析することは、この力を、あるのだ、思考の中に、我々の深みを超えている。

—3— 私は知らない、どうしてなのかは、しかし、はじめて見たのだが、その建物を、気持ち、堪えがたい陰鬱な、浸透していった、私の心に。

私は言う、堪えがたいと。なぜなら、その感情は、和らげられなかったからである、僅かによつても、あのなかば心地よさの、詩的であることによる、感傷が、心が普段は知覚する、荒れ果てた自然の表情からさえ、荒涼としても、凄惨なもの。

—7— 不可思議だった、

まったく解きあかせない、また私はうち勝てなかった、影のようないろいろの妄想に、群がり寄ってくる、私に、あれこれ考えているとき。

—4— 私は眺めた、情景を、私の前にある、その家を、そして飾りのない風景の姿を、その邸内の、荒れはてた幾つかの壁を、空虚な眼のような窓を、僅かの伸びすぎた菅草を、4・5本の白い幹を、朽ちた樹々の。

—9— 可能だろうと私は考えた、違えるだけで、配置を、個々の事物の、この景色の、細部の、この画面の、十分であるうと、減少するか、きつと、すっかり無くすのに、与えている力を、もの悲しい印象を。

崩壊、アツシヤー家の

『アツシヤー家の崩壊』

エドガー・アラン・ポー著

ナレーター

ウエイン・ジューン

宮下忠雄 聴語順訳

彼の心は掛かれる琴

触るれば鳴る

デ・ベランジエー

まる一日じゅう、陰鬱なうす暗いもの音もしない日の、秋の、その年の、雲が掛かった、重苦しく低く、空に、私は通りすぎていった、一人で、馬に乗って、妙に寂しい地域を、田舎の。

そして、ようやく、私はたどり着いた、影が、黄昏の、迫ってくるころ、見えるところへまで、憂鬱な館の、アツシヤーの。

私は知らない、どうしてなのかは、しかし、はじめて見たのだが、その建物を、気持ち、堪えがたい陰鬱な、浸透していった、私の心に。

私は言う、堪えがたいと。なぜなら、その感情は、和らげられなかったからである、僅かによっても、

あのなかば心地よさの、詩的であることによる、感傷が、心が普段は知覚する、荒れ果てた自然の表情からでさえ、荒涼としても凄いのもの。

私は眺めた、情景を、私の前にある、その家を、そして飾りのない風景の姿を、その邸内の、荒れはてた幾つかの壁を、空虚な眼のような窓を、僅かの伸びすぎた菅草を、4・5本の白い幹を、朽ちた樹々の。

まったくの沈鬱さがあり、魂の、喩えることが出来ない、この世の感覚に、もつと適切に、酔いざめの気持ち以外には、耽溺する者の、阿片に、痛ましい移行、日常生活への、いまわしい降下、あのヴェール（覆うもの）の。

氷の冷たさがあった、沈みこみと、病みこみと、心の、救いようのない侘しさで、思いの、どんな刺激でも、想像力の、為しえない、何かに、崇高な。

何がこうさせるのだろう、私は立ち止って考えた、なんだろう、うち沈ませるものは、自分を、

THE FALL 崩壊,
OF THE HOUSE OF USHER アッシャー家の
『アッシャー家の崩壊』
by Edgar Allan Poe エドガー・アラン・ポー著
Read by Wayne June ナレーター ウェイン・ジューン
宮下忠雄 聴訳

Son coeur est un luth suspendu; 彼の心は掛かれる琴
Sitot qu'on le touche il resonance. 触れば鳴る
— De Beranger. デ・ペランジェー

DURING the whole まる一日じゅう,
of a dull, dark, 陰鬱なうす暗い
and soundless day もの音もしない日の,
in the autumn of the year, 秋の、その年の,
when the clouds hung 雲が掛かった,
oppressively low 重苦しく低く,
in the heavens, 空に,
I had been passing 私を通りすぎていった,
alone, 一人で,
on horseback, 馬に乗って,
through a singularly dreary tract 妙に寂しい地域を,
of country; 田舎の。
and そして,
at length found myself, ようやく、私はたどり着いた、
as the shades of the evening 影が、黄昏の、
drew on, 迫ってくるころ、
within view 見えるところへまで、
of the melancholy House 憂鬱な館の、
of Usher. アッシャーの。

I know not how it was 私には知らない、どうしてなのかは、
— but, しかし、
with the first glimpse はじめて見たのだが、
of the building, その建物を、
a sense of insufferable gloom 気持ちだが、堪えがたい陰鬱な、
pervaded my spirit. 浸透していった、私の心に。
I say 私は言う、

insufferable; 堪えがたいと。
for the feeling was なぜなら、その感情は、
unrelieved 和らげられなかったからである、
by any 僅かによっても、
of that half-pleasurable, あのなかば心地よさの、
because poetic, 詩的であることによる、
sentiment, 感傷が、
with which the mind usually 心が普段は
receives 知覚する、
even the sternest natural images 荒れ果てた自然の表情からでさえ、
of the desolate or terrible. 荒涼としても凄いの。

I looked upon the scene 私は眺めた、情景を、
before me 私の前にある、
— upon the mere house, その家を、
and the simple landscape features そして飾りのない風景の姿を、
of the domain その邸内の、
— upon the bleak walls 荒れはてた幾つかの壁を、
— upon the vacant eye-like windows 空虚な眼のような窓を、
— upon a few rank sedges 僅かの伸びすぎた菅草（すげくさ）を、
— and upon a few white trunks 4・5本の白い幹を、
of decayed trees 朽ちた樹々の。
— with an utter depression まったくの沈鬱さがあり、
of soul 魂の、
which I can compare 喩えることが出来ない、
to no earthly sensation この世の感覚に、
more properly もっと適切に、
than to the after-dream 酔いざめの気持ち以外には、
of the reveller 耽溺する者の、
upon opium 阿片に、
— the bitter lapse 痛ましい移行、
into everyday life 日常生活への、
— the hideous dropping off いまわしい降下、
of the veil. あのヴェール（覆うもの）の。

There was an iciness, 氷の冷たさがあった、
a sinking, 沈みこみと、
a sickening 病みこみと、

of the heart	心の、	I reflected,	私は考えた、
— an unredeemed dreariness	救いようのない侘しさで、	that a mere different	違えるだけで、
of thought	思いの、	arrangement	配置を、
which no goading of the imagination	どんな刺激でも、想像力の、	of the particulars	個々の事物の、
could torture	為しえない、	of the scene,	この景色の、
into aught	何かには、	of the details of the picture,	細部の、この画面の、
of the sublime.	崇高な。	would be sufficient	十分であろうと、
		to modify,	減少するか、
		or perhaps	きっと、
What was it	何がこうさせるのだろう、	to annihilate	すっかり無くすのに、
— I paused to think	私は立ち止って考えた、	its capacity	与えている力を、
— what was it	なんだろう、	for sorrowful impression;	もの悲しい印象を。
that so unnerved	うち沈ませるものは、		
me	自分を、	and, acting upon this idea,	そこで、この考えにしたがって、
in the contemplation	見つめているうちに、	I reined my horse	私は近づけ、馬を、
of the House	館を、	to the precipitous brink	けわしい崖縁に、
of Usher?	アツシャーの？	of a black and lurid tarn	黒い無気味な沼の、
		that lay	たたえている、
It was a mystery	不可思議だった、	in unruffled lustre by the dwelling,	静かな光を、この家のそばに、
all insoluble;	まったく解きあかせない、	and gazed down	見下ろした、
		— but	が、
nor could I grapple	また私はうち勝てなかった、	with a shudder	身ぶるいするばかりだった、
with the shadowy fancies	影のようないろいろの妄想に、	even more thrilling than before	やはりもっと恐ろしくなり、前よりも、
that crowded	群がり寄ってくる、	— upon the remodelled	変形した
upon me	私に、	and inverted images	逆さの影を、
as I pondered.	あれこれ考えているとき。	of the gray sedge,	灰色の菅草や、
		and the ghastly tree-stems,	気味のわるい樹の幹や、
I was forced	私は仕方なかった、	and the vacant and eye-like windows.	うつろな眼のような窓などの。
to fall back	落ちるより、		
upon the unsatisfactory conclusion,	満足しがたい結論に、	Nevertheless,	にも拘わらず、
that while,	そこには、	in this mansion	この屋敷に、
beyond doubt,	疑いもなく、	of gloom	陰鬱な、
there are combinations	組み合わせがあるのだが、	I now proposed to myself	私は今、意図している、
of very simple natural objects	まことに単純な自然物の、	a sojourn of some weeks.	滞在しようと、何週間か。
which have the power	力を持っている、		
of thus affecting us,	このように影響している、我々に、	Its proprietor,	その主人、
still	そして、	Roderick Usher,	ロデリック・アツシャーは、
the analysis of this power	分析することは、この力を、	had been one	一人だった、
lies	あるのだ、	of my boon companions	私の気の合った友達、
among considerations	思考の中に、	in boyhood;	少年時代の、
beyond our depth.	我々の深みを超えている。	but many years had elapsed	が、長い年月がたっていた、
It was possible,	可能だろうと		